おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和５(2023)年
10月号
通巻638号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和５年10月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45-1192
★印　刷　大倭印刷株式会社
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

《コスモス》　吉山安彦　２０２２年　油彩　国立療養所菊池恵楓園歴史資料館所蔵（文・４頁）

再録 平成2(1990)年3・4月号『おおやまと』より

日本のお役目について～外から日本を考える～（中）

日本山・寺沢潤世上人との対談　法主　矢追日聖（満78歳）

前号に続いて去る（平成2年）1月8日、大本宮拝殿において、法主様と日本山妙法寺の僧、寺沢潤世上人が対談されたものを中心に野草社の石垣雅設さんの話された部分も含めて編集しました。

（編集部）

世界に開かれた日本に

法主　今は何か知らんけど、斑鳩の里というのは法隆寺があって世界最古のお寺だと観光客が行って、聖徳太子を賛美してお参りしております。けれども私は、斑鳩の里というたら、とにかく悲運な、悲しい里と思ってます。

何の因縁があったか知らんけれども昭和12年やったか14年やったか、今の法隆寺の中に若草伽藍というのがあって、私は石田茂作先生（※仏教考古学者、1894～1977）の手伝いで、その発掘調査を一緒にやらなきゃならんようになってしまったんです。

若草伽藍というのが聖徳太子のお建てになったお寺で、これがもう焼けているんですけれども、当時は現在のお寺が聖徳太子の建てられた寺だ、いや一度焼けて再建されたものだと、再建、非再建が学者の間で論争されていたんですね。

若草伽藍を発掘していきますと、現在建っている法隆寺の中に入っていくので再建説になってしもうたんですが、あれは本当は聖徳太子の怨霊鎮（おんりょう）めのために建てたものですね。

聖徳太子は恨んでいないと思うんです

が、やはり残っている者としては恨まれていると、聖徳太子が恐いですからね。

寺沢　日本の何といいますか、イデオロギーとか宗教抗争とか権力抗争とか、天皇の跡継ぎ問題などあらゆる我執我欲が渦巻いている時代でしたからね。

法主　あの時代、崇峻天皇が暗殺されて次に推古天皇が立たれて、聖徳太子はその助手のような立場でやっていった。自分が天皇になるとうまくいかんと分かっておるし、その願望もないですよ。

十七条憲法は聖徳太子のウサ晴らしやわね。闘争闘争でもって死んでいくから、「和を以て貴し」と「和」が一番先に出てくる。あれはもう聖徳太子の遺言ですよ。

今でも聖徳太子は霊界では色々と活躍されております。けれども現界で生きていた時の汚れも提げてはりますからね。

大倭のここでも、聖徳太子は活躍されておりますがね。私も霊界と通じる面があるんで、まあそんなことは気違いの世界やけど、私は不思議と太子に一番惹かれるんです。

寺沢　そうですか。私はもちろん日蓮聖人の法華経の信者ですけれども、日本から離れ、世界の中に置かれた今の日本の自分達の情況というものをヨーロッパから眺めております。そこで日本が自分で自分を見直して、世界全体のために拠って立つ、必要な拠り所をどこに求めたらいいのかということを考えますとね、その源流といいますか、なぜか聖徳太子に惹かれるんです。

一応日本を一つの民族として、かつてあったきれいな日本の魂を称賛するだけでなくて、その上に今度は世界に開かれた日本を出していくといいますか、日本を魂の世界で鎖国にしてはいけないと思います。

日本の歴史の、時々吹き上げてきた国枠的思想に全く閉じこもってしまわずに、世界に開かれた日本になる必要があると思います。

日本国と隋

法主　聖徳太子さんはあの時代に、中国の隋の国に向かってね、日出ずる処の天子なんてあんな言葉を使うってことは、ものすごく国粋主義ですわな。普通の者では隋の皇帝には言えんことですよ。

そのこと一つを見ても太子の気持というものは、そりゃ大したものやと思います。太子自身のとりまきに帰化人がたくさんおるんやからね、隋の情況もよう分かってますがな。

隋は一つ間違ったら、日本みたいな国はキュッとひねりつぶされるような相手ですからね。文化から言うても実力から言うてもね、あの時代の隋は世界一ですよ。そういうような意味においても聖徳太子という人は立派な人やと思います。

けれども私、十七条憲法は、もう太子さんの愚痴や思ってます。あれだけ愚痴を言わないとおさまらんかったんやろね。

今、霊界でも平和になることを望んではるんやけれども、昔の因縁因果というか、なかなか平和にはならない。しかし、昨年、昭和天皇が亡くなられて、ちょうど1周年経ちましたわね。平成と年号も変わって2年、西暦の方も１９９０年と変わって、一つの節の年まわりになってきてます。何かそういう意味において、今年は何かの節目やなあと思います。

寺沢　それ本当に感じます。

法主　世界でも大きな動きやしね。あのベルリンの壁を、よう取りよったなあと思ってビックリしてますねん。

寺沢　本当にそうです。私は十何年ヨーロッパにおりましてね。いわゆるＮＡＴＯ（※北大西洋条約機構）とワルシャワ条約機構という2大軍事同盟がお互いに敵対して、そして核兵器を握って、世界を十何回も焼き滅ぼすだけの物を持たないと安心して生きていけないというヨーロッパ社会の原罪といいますか、宿命というものを、その姿に見ました。

自分達は何も出来ないけれど、そのためにお祈りしようと思ってやってきたんです。ＮＡＴＯの本部のあるブリュッセルで太鼓を打ちまして、そこからベルリンの壁まで歩いたことがあります。

法主　そうですか。

寺沢　その時に今度は東からワルシャワ条約機構のワルシャワからベルリンに向かってと、2組で太鼓を打って歩いたんです。

西側は問題はなかったんですが、東側はまだ共産主義国家でして、自由に太鼓を打ってお祈りして行脚するというようなことを認めてくれないんです。それに当時のポーランドは、あの連帯という労働組合の運動が大変盛り上がって、それが非合法になっていて地下運動しかやれない時期で、そういうバッジなんか持って歩くと皆ひっつかまったんですね。まだ5・6年前ですか。

法主　そうでしょうね。

寺沢　その時期に、何としてもやろうということで、やったんです。そしたら不思議とやれたんです。

法主　ようやりはったですね。

寺沢　その時、私共は1銭も持ってなかった。それでどこで泊まるか、どう歩いて行くか全然決めてなかったんです。

もう行く先行く先で、色んな人に泊めて頂きましてね、弁当代まで出して頂いたこともありまし

た。結局、野宿するようなことは一度もなかったです。

　そして、東からもズーッとベルリンの壁へ攻めて、西からもベルリンの壁を攻めて、両方でバッタリ会ってね。両方から太鼓を打って……。

法主　よう行かはったね。

寺沢　ええ、ですから感慨無量ですよ。その頃はまだこんなに早く、ベルリンの壁が無くなるとは思えない時でしたし。

法主　ヘタすると命を落としたかしれん。

　こうしてずっとヨーロッパに行ってはるんやから、やっぱり肌で感じて向こうの情況がよく分かりますわ。ニュース見たりするんじゃなくてね。

ヨーロッパの業（ごう）

寺沢　それだけヨーロッパは特別に業が深かったんだろうと思います。

法主　そうでしょうなあ。

寺沢　あの狭いヨーロッパ、大陸といってもユーラシア大陸から比べれば半島の、ただ小さな所ですからね。そこで真っ二つに分かれて、火が吹けば地球全体が滅びてしまうような物を営々として築いてきたわけです、ヨーロッパ文明というものはねえ……。

法主　これから共産圏もどう変わっていくか分かりませんけど、とにかく最近は何か変化していくような感じがしますね。

寺沢　私が一番心配なのは日本ですね、日本の対応は何も出来ていないから。

法主　ああ、そうかもしれませんね。

寺沢　お金だけが世界で一番貯まったんですよ。日本人はそういうことについては言いますけど……。

法主　一般の日本人というのは案外ヨーロッパとか世界のことは感じない人が多いですね。もう自分の家庭さえうまくいけばいいと、狭い島国やから、どこかそういうところがあるんやねえ。

寺沢　そうですね。

法主　今度また英国へ行かれるんですか。

寺沢　モスクワです。ベルリンにも寄りたいと思っています。

法主　まだ弾が飛んでくる所もあるんでしょう？

寺沢　ルーマニアでしょうね。でも他は終わりましたね。

法主　ああ、そうですか。イランの方かイラクの辺りは？

寺沢　あっちも終わって。

法主　もう終わってるんですか。

寺沢　はい。

法主　くだらんケンカするんやねえ。

寺沢　そうですね。紛争をやっている所はまだまだあります。イスラエルもそうですし。

法主　ソ連も何かゴタゴタしておるようですが。

石垣雅設　動きとしては、ＥＣ（※欧州共同体、その後ＥＵ欧州連合となった）みたいに、ソ連邦を独立した者同士がゆるやかに連合した形にしたいと、独立運動している人達がいるようです。

　その辺りのことを津村喬さんがフィンランドから原稿を送ってくれて、ソ連のエストニアのことなど書いてありました。エストニアで独立運動をやっているリーダーが言うには、我々は負けないって、けれど勝たないって言うんだそうです。今までは相手を倒して勝つことを目指した運動だったけれども、決して負けないし勝たないという、そういうところまで見通して運動をしているんですって。

法主　それも平和やけどね。

寺沢　そうですね。

石垣　だから６００キロも手をつないで人間の鎖を作ったんですね。それも手をつないだらもういい、手をつないだらもうおしまいと、実に静かに……。しかも手をつなぐ間に、お花を供えたり、色んな物を供えたりする。生きている者だけじゃなくて、今日までたくさんの死者達がいるんだということをきっちりと認識して、その死者達とも一緒に手をつなぐんだという、そういう人間の鎖だったんです。

　生きている人間と、たくさんの犠牲者と、これから来る子供達も含めた６００キロの人間の鎖だったんですね。

　だから共産主義国、社会主義国が資本主義国にもどるというような動きではなくて、人間として本当に一人一人が、死者も一緒に手つなぐという気持になってやっていくというね、これはすばらしいと思いました。

法主　そりゃあ霊界人を忘れたらイカンもんね。そういうことに気が付くというのが平和運動やもの。

石垣　ええ、そうですねえ。別にお互いに交流があるとか無いとかでなくて、人間の意識というのは、色んな準備があって同時に開くんだと思うんですね。

　エストニアなんてソ連の端っこみたいな所で起こしている運動ですが、日本で一番希望し願っているのと同じ質のものが世界に顕われてきているわけですよね。季節と共に、両方がパアッと伸びてくるようなところがありますね。

　法主様が言っておられるようなことがね、全然、矢追日聖なんて知らなくても、やはりあちこちで出てくる……。

法主　時機やわなあ。春になれば花が咲くんやけ

れども、それが冬の間にどこかで用意しとるんやものね。

寺沢　ええ。

法主　花がね、咲いている種類は違うかもしれないけれど、春になったら皆同時に咲いてくるんやし、私は結局ね、それが本当の祈りやと思うんですよ。

日本で私の平和の祈り

法主　私の場合、表に向いて咲くような運動やなくて、ここでじっと自分は自分で霊界の人達と現界の人がお互いに手をつなぐようにね、そういうようなのが祈りです。

私はそれでいいと思っています。だからまだ日本から外へ出たことあらへん。まずもう飛行機に乗る気は全然しないし、土から離れるのは嫌やからね。日本から出ないで、じっとここでやってます。

私は40年ばかり、大倭に出て来る人達に、そのように話さしてもらってますけれども、受け取る側がどれだけ響いているか分からない。皆、我が身大事で、周囲のことを考えるというのは案外少ないですね。大衆的な静かな行き方をしますから、本当の平和の祈りと言うたかて、案外響かない人が多いです。

それでも私は飽くわけにいかんから、これは死ぬまで言わなアカンと同じことをしゃべっているんです。あるいは死んでから響くのとちがうかと思ってみたり……。（笑）

だから日蓮聖人でも、身延で死にかからはった時にほんまに付いて行ってはった人は少なかったと思う。やっぱり亡くなってから色んな人が信仰するようになってきたと思うんですけれどもね。

日蓮聖人は池上の本門寺で亡くなっておられるけど、肉体的にはかなり苦しかったやろなあと思います。身延に入ってからは殆ど喘息でしょ。

あの人は酒が好きやったらしいし、「油のような酒五升」という礼状なんか出してはる。ああいうような人間性が、私個人ではものすごく好きですねん。生き神さんのように思っている人もあるかしれんけど、出家さんというような感じがしないんやけどね、私は。（つづく）　文責・編集部

表紙絵について

「光の絵画」の保存活動

キュレーター　藏座江美
（そうざ・えみ　熊本県）

❖絵画クラブ金陽会との出会い

国立療養所菊池恵楓園には「金陽会」という絵画クラブがあります。１９５３年に一人の看護師の呼びかけで発足しました。毎週金曜日に活動されていたそうです。「暗い絵が多くなりがちだったけど、太陽のように明るく活動していこうと、『金陽会』という名前になった」と、現在でも恵楓園で絵を描き続けている吉山安彦さんが語ってくれました。

金陽会との出会いは２００３年まで遡ります。熊本市現代美術館在職時、菊池恵楓園入所者の女性が子ども代わりに大切にされてきた抱き人形の「太郎くん」を、２００２年の開館記念展で紹介したことがきっかけです。お恥ずかしい話ですが、「太郎くん」に出会うまで、菊池恵楓園のことも、ハンセン病問題についても全くといっていいほど知りませんでした。

「太郎くん」に出会い、聞きかじった程度の知識で、金陽会のアトリエを訪れました。社会に対する怒りや恨み、故郷や家族と離れて暮らさざるを得なくなった辛さや哀しみが描かれた絵を前に、どういった態度で接したらいいのだろう、と緊張していたことを覚えています。

当時は9名の方が絵を描かれていて、皆さんがアトリエの隣の部屋で待っていてくれました。お互いにやや緊張した面持ちで自己紹介したあと、隣のアトリエに移動して絵を見せてもらいました。そこには想像していたような作品ではなく、明るく光り輝くような作品が並び、大げさではなく膝から崩れる落ちるような衝撃を受けました。それが自分の思い込み、偏見を突きつけられたからだと自覚するのに時間はかかりませんでした。

❖作品を観てもらうために

それから、金陽会の作品を「光の絵画」と名づけ（名付け親は一緒に絵を見に行った当時の学芸課長）、美術館で展覧会を3回開催しました。２００７年には全国13ヶ所の療養所、韓国の小鹿島（ソロクト）、台湾の楽生院にも調査に行き作品を紹介しました。その時初めて全国の療養所を訪れ、療養所で絵画作品などの創作活動が行われていたことが確認できましたが、遺族などの引き取り手がいない場合は、焼却処分されていることも知り、愕然としました。

金陽会の作品はどうなるのだろう？と最初の疑問が浮かんだのもこの時です。かといって、療養所の創作活動の調査に真剣に取り組んでいたわけではなく、年に1回行われる恵楓園の文化祭を観に行ったり、時々アトリエにお邪魔してお茶を飲んだりするくらいで、今思えばなんて贅沢な時間を無駄に過ごしていたのだろうと思います。

それから、金陽会メンバーがひとり、またひとりと亡くなられていき、作品の行く末がどうなる

のか心配になってきました。金陽会代表の吉山さんが皆さんの作品を空き部屋になった寮に保管されていましたが、誰の作品が何点あるのかといった詳細や写真を撮っておく必要があり、それは高齢化が進む入所者の皆さんにできる作業ではなく、おせっかいでしかないとは思いつつも作品の保存活動を始め、今に至ります。

❖《コスモス》に寄せて

今回ご紹介する作品は、今なお恵楓園で創作活動を続けられている金陽会代表の吉山安彦さんの《コスモス》です。金陽会には９００点以上の作品が残っていますが、吉山さんの作品は２００点を優に超えます。花の絵も数多く描かれている吉山さんですが、コスモスをモチーフに４点ほど描かれていてお好きな花のひとつのようです。いずれの作品にも月が描かれていて、「宇宙のこともコスモスて言うでしょ」と、おっしゃったことを思い出しました。この作品のコスモスはにょきにょきと空に向かって伸び続け、今にも月に届きそうで、「生命力」を見ているようです。93歳を過ぎてもなお、繊細さの中にここまでの力強さを感じさせる吉山さんには圧倒させられっぱなしです。

年明けには福岡県で金陽会の作品展を予定しています。まだご覧になったことがない方はぜひ観にきてください。（写真は今年の９月14日～30日の、熊本県宇城市・不知火美術館にて）

足あと足おと

人は亡くなったら終わりではないことを確かめる旅（続）

神奈川県川崎市　日下部　洋　介

山脈（やまなみ）の会で、夜、みんなで一つの部屋で語り合う時間がありました。自分は寝るのもその部屋だったのですが、みんなが語り合った後の空気がエネルギーのように拡がっていて、ここでは眠れないと思って部屋を出ました。そしたら、加藤彰彦さんと会って、「ちょうど呼びに行こうと思っていた、一緒に居てほしい人がいる」と言われました。

加藤さんと同室の男性がベットで横になり、奥さまと一緒に居ました。その方は、ガンで体調がすぐれない中、神奈川県の大和市から京都まで車を運転して来たとのことでした。

食事と水分もあまり入らないようでした。一緒に少しお話をしていたら、ご自身のご病気のことを話されて、話しながらその方のお腹がグルグルと腸が動く音がしました。身体の細胞が動いているのだと思いました。水よりもポカリの方が入っていきやすいと思ったので伝えました。少し水分が取れて顔色が良くなった感じがしました。

そのままその男性の隣のベッドで寝ることになりました。起きていたいと思い、男性が寝返りをうったりしたら、大丈夫かな、と見ていました。その時に、頭に介助でかかわっていた亡くなった方のことが浮かんできました。それで、男性が何度か寝返りをうって3回目くらいの時に見たら、気持ち良さそうな寝息とともに笑顔で眠っていました。驚いたのですが、その顔は、亡くなった介助でかかわっていた方の顔になっていました。思わず涙がこぼれてきました。一緒にこの旅に来てくれたんだと思いました。自分は安心して、気がついたら眠っていました。

翌日から、男性はご飯を少しずつ食べれるようになったようでした。後に亡くなったと奥さまからご連絡があり、葬儀に行かせていただきました。京都で一緒に過ごしたあの時間は、今でも心に残っています。

初めて大倭紫陽花邑に行った時、駐車場から見えた杉本順一さんがいらっしゃる建物の風景が、なぜかどこかで見たことあるように感じました。

杉本さんが亡くなった人について「こちらが本気で想えば相手は必ずこたえてくれる」と言っていたこと、岸田哲さんが「亡くなった人の写真を額に入れている。手を合わせていると仲間が増えていくように感じる」と言っていたことが印象に残っています。

旅の最後は、大和西大寺駅でした。岸田さんと紫陽花邑の高橋良美さんが送ってくださいました。車から降りたとたんに、旅の間ずっと不思議なくらい青空で雲一つなかったのに、急に雲がかかりました。それも不思議に思い加藤さんに聞いてみたら、加藤さんは「それは、旅が終わったということです」と一言、言いました。「そういうことなんだ」と納得しました。

山脈の会、大倭紫陽花邑、法隆寺の旅から帰ってきてから、ふと、「人が亡くなるということは自分の中に共に生きていく人が生まれること」なのだと思いました。

今、自分のひきこもり経験がいかせないかと思い、元々通っていた地域の居場所で働いています。経験をいかせると思うことが、一つの思い上がりである現実もありますが、一瞬一瞬を感じて、自分にウソをつかないで生きていきたいと思っています。

令和5年5月29日～6月3日

こもれる魂魄の地を訪ねて（第54回）

東北・北海道の旅

杉本順一

その3
蟹がご縁の顕幽不二

5月31日（9時45分）ホテル法華クラブをチェックアウト。（12時10分）函館空港出発、新千歳空港へ。

レンタカーで日ハムのホーム球場、エスコンフィールドへ。試合が始まる前で中には入らず、外から眺める。甲子園球場との大きな違いは、車で来るのが普通らしい。駐車場がでかい。球場そばのパン屋さんでパンを買う予定。残念、待ち人の行列がすごい。あきらめて夕食を楽しみに……。

実は娘達が旅行プランを進めるうち、北海道に行くんやから、札幌のすすきの辺りでいろんな蟹を食べさせてもらえるお店をとインターネットで探した。目を引く店名を見付け、興味をそそられた。どういう意味なのか店名「氷雪の門」を検索してみると、5日目に行く稚内と深いつながりのある話だった。店名の由来を読んでここに決めた。

たらばガニと店名・氷雪の門について、お店のHPより抜粋します。

《氷雪の門・創業者新道喜久治さんが昭和32年から、すすきので営業していたうなぎ屋時代、冬に集客できる素材を探していたところ、漁師の義兄からたらばガニの情報を得た。だが産地のどこを探してもまったく見当たらない。なぜなら、たらばガニは戦後、貴重な外資獲得商品として缶詰で外国へ輸出するために政府の管理統制下にあり、昭和30年代でもほぼ全量が缶詰にするために獲られて輸出されていたからだ。高価な「カニ缶」は日本人の口に入ることも稀だった。

それ以前も「鱈場蟹」の名が示すとおり主力だった鱈をとる網にひっかかる邪魔者扱い。当時たらばガニは流通もしていないし知る人さえ少なかったのである。

あきらめきれない新道さんは稚内市の浜森市長に相談したところ、たらばガニが政府の管理下にあった時代から大手に肩を並べてたらばガニを扱っていた稚内の業者の又一産業を紹介された。又一産業の岡本社長にとって缶詰以外でたらばガニを売ってくれという話は初めてで、商売にならない話だったが稚内の宣伝にもなるし、「札幌でいつでもたらばガニが食べられる店を作る」というのは画期的でロマンがあり新しいチャレンジでおもしろいんじゃないかということになったそうだ。

たらばガニの調理方法の研究も終え出店の目処がついたと新道さんが浜森市長に報告したところ「たらばガニを扱う店だから〝氷雪の門〟という名にしたら良い」と稚内の小高い丘から、はるか樺太を望む戦没乙女の慰霊碑として全国に知られる「氷雪の門」、この由緒ある名を一介の飲食店に期待を込めて贈って下さったのだそうだ。そうして昭和39年ススキノビルの地下で全国唯一のたらばガニ料理専門店「氷雪の門」はスタートした。》

――このお話だけでは「慰霊、鎮魂」の旅にはならない。そこで私自身が納得するために……さらに検索した。

○樺太島民慰霊碑　氷雪の門（稚内公園内）

高さ8mの望郷の門、雪と氷の中で厳しく生き抜き、そして敗戦の失意から再びたくましく立ち上がった人々を象徴する高さ2・4mの女性像からなります。（写真）

かえらぬ樺太への望郷の念と、かの地で没した幾多の同胞の霊を慰めるため、昭和38年（1963）8月に建立以来、稚内市では毎年8月に、樺太ゆかりの人々による慰霊祭「氷雪の門・九人の乙女の碑平和祈念祭」を行っています。

【碑　文】

人々はこの地から樺太に渡り、樺太からここへ帰った。戦後はその門もかたく鎖された …略…

○九人の乙女の碑（同公園内）

昭和20年（1945）8月20日、終戦5日後に、樺太真岡郵便局で電話交換業務を終えた後、自ら若い命を絶った9人の女性の霊を慰めるために建てられました。

交換手姿の乙女の像を刻んだレリーフをはめ込み、亡くなった9人の女性の名前、そして彼女たちの最後の別れの言葉となった『皆さん、これが最後です。さようなら、さようなら』の文字が刻まれています。詳しくは、「九人の乙女の物語」をご覧ください。

【碑　文】

戦いは終わった。それから5日、昭和20年8月20日ソ連軍が樺太真岡上陸を開始しようとした。

その時突如、日本軍との間に戦いが始まった。戦火と化した真岡の町、その中で交換台に向かった九人の乙女等は、死を以って己の職場を守った。

窓越しに見る砲弾のさく裂、刻々迫る身の危険、いまはこれまでと死の交換台に向かい『みなさん、これが最後です。さようなら、さようなら……』の言葉を残して静かに青酸カリをのみ、夢多き若き尊き花の命を絶ち職に殉じた。戦争は再びくりかえすまじ。

――平和の祈りをこめて尊き9人の霊を慰む。（P）

【九人の乙女の物語】

（稚内市役所による観光情報の抜粋）

真岡町（現ホルムスク）は、人口約2万人で樺太西海岸南部に位置し、北海道の各港との定期船も絶えなかった平和な港町でした。

日本領である南樺太は、ソ連領である北樺太とは北緯50度線をもってきっちりと一線を画されており、昭和16年（1941）太平洋戦争（第二次世界大戦）に突入することになりましたが、日ソ中立条約（領土不可侵・中立維持を約束した条約）が締結されていたこともあり、国境での紛争はほとんどありませんでした。

ところが昭和20年（1945）2月に、米・英・ソの首脳によりヤルタ秘密協定が結ばれたこともあり、同年4月ソ連は日本に対して条約を一方的に破棄する旨を通告、対日戦に備えて満州や樺太、朝鮮の国境地区に兵力を集結しました。

ヤルタ秘密協定は「ドイツが降伏し、ヨーロッパにおける戦争が終結したのち、2～3ヶ月後には南樺太をソ連に返還することを条件に、ソ連が日本に対する戦争に参加する」ということを約束したものでした。

そして、昭和20年（1945）8月9日の朝、樺太国境警察がソ連軍の不意の攻撃を受け、40年間にわたる国境の静寂が破られたのです。

当時、真岡郵便局における電話交換業務は、市内・市外ともすべて女性交換職員による手動交換接続方式でしたが、特に戦時下における電話交換業務は国防用また緊急連絡用として重要な使命を担い日夜繁忙を極めていました。

この非常事態に、老人、子供、女性、病人等を優先して島民の緊急疎開が開始されました。そして8月16日、上田・真岡郵便局長は上司から「女子職員は全員引き揚げるよう、そのため業務が一時停止しても止むを得ない」との命令を受けました。

ほっと安心すると同時に、皆その知らせを喜んでくれるだろうと思っていた上田局長でしたが、意外なことに局員からは「全員、疎開せず局にとどまると血書嘆願する用意をしている」と告げられました。上田局長はソ連軍の進駐後起こるであろう悲惨な状況を話し説得したが応じてもらえなかったといいます。

同じ樺太にある泊居郵便局長は、当日の状況をこう話しています。「午前6時30分頃、渡辺照さんが『今、皆で自決します』と知らせてきたので『死んではいけない。絶対毒を飲んではいけない。生きるんだ。白いものはないか、手拭いでもいい、白い布を入口に出しておくんだ』と繰り返し説いたが及ばなかった。

高石さんの知らせで自らも郵便局にかけつける途中、腕に銃弾を受けてソ連兵に連行されてしまった真岡郵便局長は、数日後ソ連軍の将校の許可で局内に立ち入ることができました。

その時の様子を、同局長は「9人は白っぽい制服にモンペをはいており、服装はみじんも乱れていなかった。また、交換台には生々しい数発の弾痕があった。さらに、睡眠薬の空き箱があったことは見苦しくないようにするため、睡眠薬を飲んだあと、青酸カリを飲んだのであろうが、息絶えるまで送話器に向かって呼びかけていたようだ」と語っています。

彼女達は、ブレストを耳にプラグを手に握りしめ、最後まで他局からの呼び出しに応ずるために交換台にしがみついたまま倒れていました。遺体の確認に立ち会ったソ連軍将校も、悲惨な室内の状況を目の前にして、胸で十字架をきって黙祷したといわれています。

――9人の乙女達の、あのような最期を知り、今は行くことの出来ない樺太の地を思う。（P）

今年2月20日、私は沖縄の摩文仁の丘に立っていた。今もあの地で最期を迎えた女子学生の叫ぶ声が聞こえてくる。

樺太には乙女達の最期の心が、その時のまま、今もこもっているはずだ。また彼女達の最期の迎え方にはただただ、合掌するのみです。

「氷雪の門」での夕食では、彼女達を始め日本に帰還できず樺太の土となった人達に、カニ料理をお供えして食事を始めると「アナタノオコシヲ　センネンモマンネンモ　マッテイル　オモイデシタ」（霊界の法主のお越しを　千年も万年も待っている気持でした）とのそんな言葉が伝わってきました。

実は6月2日に予定の稚内行きは、強風のため残念ながら飛行機は飛ばなかった。

稚内に立ったとしても樺太は遠かったと思う。

夕食後高速道でホテル、JRイン旭川に向かう。

途中、パーキングエリアでココアを供え、新十津川村（元奈良県十津川流域一帯の山村集落。明治22年川の氾濫で大被害。数百戸が北海道に移住）の先祖さん達に挨拶する。夜9時近くホテル着。

あじさい日誌

9月10日　大倭会主催禊会。8月号の「寸沙」に登場の廣瀬雅雄さんと聞き手の藤本宏秋さんが参加されました。

9月13日　大倭会館前にサルが来ていました！（菅原園職員宮﨑栄次朗さん撮影）

9月15日　大倭神宮月次祭。

9月17日　NPO法人むすびの家総会で理事長が湯浅進さんから青山哲也さんに交代することになりました。

9月21日　夜、紫陽花邑付近に落雷があり翌朝拝殿のエレベータ故障発見、大倭印刷でも故障の出た機器がありました。闇夜に光る落雷の音を少し花火気分に思った、そのたりか？

9月23日　大倭大本宮月次祭。

この日の法話は、昭和41年9月23日月次祭より、『おおやまと』令和2年9月号に「幸せはどこにあるのか―本当の意味で自分を愛するとは」として掲載分。

9月29日　大倭会文化行事参加のため、佐渡の平田緑さんは家族より1日先に大倭会館泊。

9月30日　旅行参加のため、青森の高橋延之さん（旅行後10月7日まで滞在）、町田市の春日作太郎さん（同じく10月6日まで滞在）、佐渡の平田舞姫さんと息子の友悠（4歳）・大和（2歳）君、東京から平田太一さんが大倭会館で前泊しました。福井の齋藤正宏さんは李章根さん宅泊。

10月1日　午前9時、参加者27人元気に集合（後の都合で平田太一さんはレンタカーで追いかける）。バスの運転手さんは昨年の佐渡旅行と同じ方でした。

10月2日　そして宇賀部神社に入る田舎道で人と車が一体化したすごい運転技術を見せて下さいました。アドベンチャーワールドに向かう平田家の皆さんと別れ、午後5時前に帰着。

担当だった溝口富士男さんは妻・ツヤ子さんが亡くなって不参加となり、後を手分けして引き継いで頂き、予定通り無事に終了できました。詳しい文化行事報告は12月号の予定です。

10月6日　大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

大倭安宿苑では

（菅原園）

9月24日　プロジェクターで〝映画館〟。アニメ『スズメの戸締り』を上映しました。

（須加宮寮）

9月12日　書道クラブ。奈良県障害者作品展に向けて作品作りをしました。

（長曽根寮）

9月18日（デイ）　敬老会。記念品に手作りの兎のぬいぐるみをプレゼントしました。

9月27日（特養）　十五夜レクリエーション。歌と飾りつけで季節を感じて頂きました。

（茂毛蕗園）

9月29日　定例懇談会。鉄道好きということから鉄道が話題になりました。

（八重垣園）

9月中　カラオケで歌いながら体操が好評です。

こだまことだま

▼青森県弘前市　**石田勝利**

お久しぶりです。3～8月まで入院。現在すぐ近くのホームに入居中。ガールフレンド（98・95・93歳）に囲まれ楽しく暮らす日々。毎月の『おおやまと』何度も何度も読み返しています。

7月号金澤秀郎氏の文章に感激。大徳寺照輝（はからい）さんだったのか～30数年経って判った人。40年程前。天理教を知りたいと思い読んだのが、厚い『神の計画』の神シリーズ。霊界と現界が入り混ざり、大樹から情報を得ると平然と描かれていたり、ロシア、アメリカの冷戦を親様があの世から手助けするという、一般には理解を得難い小説。時折、大徳寺さんが伊藤青年として登場する。この人の未来は？どのようにと、心のどこかにズーッと残っていた。何かホッとした金澤氏の文化行事報告でした。ありがとうございました。

大倭会文化講演会

ゴリラに学んだ人間の本質について

日　時　令和5年11月12日(日)
午後2時～4時30分

場　所　大倭拝殿　**入場無料**　申込み不要

講　師　山　極　壽　一　氏

プロフィール：1952年東京都生まれ。京大理学部卒。屋久島で野生ニホンザル、アフリカ各地で野生ゴリラ研究。第26代京大総長。現在、総合地球環境学研究所所長。『猿声人語』（青土社）・『共感革命―社交する人類の進化と未来』（河出新書）10月刊行など著書多数。

（注意）来場は公共交通機関で。近鉄学園前南口より奈良交通バスで国際ゴルフ場前下車すぐ。

問合せ：大倭0742―45―1192（杉本）

「なおらい演芸会」についてお知らせ

今年から行わないことになり、
12月23日の日聖祭は時間が例年と変わります。

午後1時半：奥津城に参拝
午後2時　：拝殿において日聖祭

ご注意下さい！

あんない

＊月次祭（大倭神宮）
11月6日(月)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会
11月12日(日)　禊会として、上記の文化講演会を行います。

＊月次祭（大倭神宮）
11月15日(水)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大倭大本宮）
11月23日(祝)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。